



Title	後期西田幾多郎の宗教論における自己と絶対者の関係 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	侯, 乃禎
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15980号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92255
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Naizhen_Hou_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 侯 乃禎

学位論文題名

後期西田幾多郎の宗教論における自己と絶対者の関係

・本論文の観点と方法

本論文は、最晩年の西田哲学を特徴づける根本概念である「逆対応」という概念を手がかりに、後期西田哲学の核心の一つである宗教の本質、すなわち自己と絶対者との関係を考察するものである。「逆対応」概念はこれまでの研究史においてもしばしば論じられてきたが、本論文は、同概念についての先行研究を網羅的に検討した上で、西田哲学の根本に関わる諸問題、すなわち「対象論理」と「場所的論理」の意味、「自力」と「他力」の概念、宗教と道德性の関係、そして「個物」としてのわれわれのあり方について検討を加え、「逆対応」の概念を西田哲学の概念的布置のなかに位置づけて検討している。また、西田がテキストの中で深く対話している哲学者として、田辺元、キルケゴール、ライプニッツを取り上げ、西田の宗教論に様々な角度から光を当て分析している。こうした多角的な考察により、西田の宗教論が有限者と無限者に関する抽象的な思弁に留まらず、現実の世界におけるわれわれ自身と他の個物との間の社会的・道德的な関係の思索をも包含していることが明らかにされている。

・本論文の内容

本論文は序論と六つの章、および結論からなる。

序論では、本論文の目的や方法について述べた上で、西田の宗教論、特に「逆対応」の概念に関する先行研究が概観されている。西田の個人的経歴や仏教・キリスト教など特定の宗教との関係に着目した外的なアプローチと、西田哲学自体を軸にした内的なアプローチが区別され、後者のアプローチに優位性があることが主張される。その上で、「逆対応」概念の研究史に立ち入り、高坂正顕や務台理作、田辺元による早い時期の研究から、秋月龍珉、上田閑照、小坂国継、井上克人らの解釈まで、「逆対応」についての様々な解釈を網羅的に取り上げている。また、滝沢克己による西田の宗教論批判とそれへの各研究者の反応についても網羅的に検討している。

第一章では、初期の著作『善の研究』と最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」の内在的な関係と差異を探りながら、西田が定義する宗教の問題の本質である自己と絶対者との関係について考察している。これら二つの著作は、「宗教とは何かを哲学的に解明する」という課題を含む点で共通しているが、西田の言う宗教の問題は、本質的には「自己とは何か」という問題と重なる。他方、『善の研究』と「場所的論理と宗教的世界観」で西田が採用しているアプローチは異なる。『善の研究』の宗教論は、「純粹経験」という原理に基づいて、自己を神に吸収させることが宗教の極致であると解釈しているが、最晩年の西田は、「心霊上の事実」である宗教心を、「場所的論理」を導入して説明することによって、自己と絶対者の「逆対応の関係」から解釈している。「逆対応」は、矛盾や対立を含みながらも同一を求める関係であり、これを本論文は『善の研究』における一元論的傾向の克服として解釈している。

第二章では、西田晩年の著作に頻出する「論理」に着目する。西田は、「場所的論理と宗教的世界観」において、「対象論理」と「場所的論理」という二つの方法論的概念を用いているが、本章ではこれらの概念について、それぞれの内容および相互の関係性を論じている。西田は「対象論理」を批判するが、「対象論理」と「場所的論理」は相互に排他的な論理体系ではなく、「対象論理」も「場所的論理」における限定された一側面であり、その重要な一部分である。宗教との関連でいえば、西田は、到達不可能な理想地に神や仏を配置する行為を「对象的」と表現している。人が神や仏を超越的実体として想定する行為は、実質的にはその個人自身によって神や仏を定義する行為にほかならない。そこで人は自己を中心としてもものを見る立場を少しも離れていない。

これに対し、西田によれば、自己の転換によって自己を問うという宗教の問題は、「場所的論理」を通じてのみ把握される。自己から出発して自己から、ひいては「対象論理」から脱却することはできない。自己が自己を超えて「絶対者」という「絶対の他」と対峙するという「自己の転換」なしに、「対象論理」から「場所的論理」への転換は果たされない。

第三章では、「場所的論理と宗教的世界観」における核心的概念である「逆対応」に焦点を当て、西田の著作中で同概念が登場する箇所を網羅的に検討すると同時に、これまで登場した同概念の様々な解釈を取り上げ、吟味している。具体的には、自己と絶対者の相互関係を強調する解釈と、自己に対する絶対者の先行性を強調する解釈を詳細に検討している。前者は、自己と絶対者の関係が対称的になりかねないという問題を孕み、後者は自己が絶対者の自己運動に吸収される汎神論的一元論に陥る危険がある。これに対し本論は、絶対者の先行性と隔絶性を重く見つつ、超越的な絶対者はわれわれの自己との関係においてのみ現われるという点を指摘している。

第四章では、田辺元に対する西田の批判と田辺の「根源悪」概念を考察し、「自力」と「根源悪」の問題について、晩年の西田と田辺の考えを比較している。まず、西田の言う「自力」は、暗黙のうちに自己を対象化し、それを不問とする立場であるとしている。他方、田辺の「根源悪」の思想を見ると、そこでもやはり自己の対象化が批判され、根源悪が自力では除去不可能であることが論じられている。ここには、「自力」批判に関して、両者の思想に一定の親近性が見てとれる。

第五章では、西田とキルケゴールの比較を行い、西田がキルケゴールを批判する理由を探っている。そして、この比較を通じて、後期西田哲学における宗教と道德の関係性を検討し、西田の宗教論において道德的側面が失われていないという点を指摘する。キルケゴールにおいて、宗教と道德は鋭く対立するように見えるが、後期西田においては、われわれの自己が歴史的世界に於ける個であることが強調され、他の個物との関わりのなかで歴史的世界を「作る」活動において、自己は倫理的なものから無縁ではありえないとされる。

第六章では、ライプニッツのモナドロジーが西田の「個体」概念に与えた影響を手がかりにして、西田の著作における「個物」という概念を考察している。とりわけ、「我々は個となればなる程、神に近づくのである」といった類いの西田の言葉を踏まえると、西田が絶対者の他力においてわれわれ自身の「個物性」に着目していることは疑う余地がない。そこには、「個物は個物に対することによって個物である」という他の個物との関係こそが、まさしく個物の独立性を成しているという、深い自己矛盾が含まれる。そして、神との矛盾的な対峙のうちにこそ、自己が真に神に出会うという宗教的關係がある。

結論では、全体を振り返りつつ、後期西田の宗教論における自己と絶対者との関係は、対称的な相互関係ではなく、自己と絶対者とが絶対的な異他性を孕みながら結びついている関係であるという点を再び強調している。同時に、後期西田の宗教論は、自己と絶対者の関係に関する抽象的な思弁に留まらず、われわれの自己と他の個物、そして世界との関係——相互に対立しつつ結びあう関係——に根ざしている点が指摘される。西田の宗教論は、絶対者との関係のなかで、「自己とは何か」という問いをより具体的に問い究めてゆく道なのである。